



# 雲の上のキューピット

---

しあわせは永遠に

---

南 まさき

---

# 『雲の上のキューピット』

しあわせは永遠に

南 まさき

【1】

僕は今まで一度も死んだことがない。

初めての体験は、たいてい人を不安にさせる。  
僕の場合、とくにその傾向が強いようだ。  
最初の不安は、心臓が止まってしばらくしたところに訪れた。  
僕の魂が亡骸から離れて、ふわふわと浮かび始めたときだ。

これがいわゆる幽体離脱だということは知っていたが、このまま地球の引力を振り切って上昇し続け、あの世へ直行するんじゃないかと思った。  
泣き叫びたい気がした。

一体何のために僕は死んだのだろう。

本当にそう思った。

しかしそれは、取り越し苦労だった。  
寝室の天井付近で丸1日浮かんでいた僕は、妻が用意してくれた居間の仏壇の中に吸い込まれるように漂着したのだ。  
だが、ほっとしたのもつかの間、もうひとつの不安が僕を包み込んだ。

『誰かが、僕の死因に疑いを持つのではないだろうか』

だがそれも危惧に過ぎなかった。  
妻の通報で駆けつけた救急隊員は、お気の毒様と言うような声で、  
「いわゆるポックリ病です」  
と言っただけだったし、妻は僕の突然の死を、これは天が自分に与えた運命に違いないと冷静に受け止めたのだ。

もしかすると、生命遮断システムの中に、僕以外の人間の思考力を混乱させる仕掛けが施してあったのかもしれない。

僕がこの世に別れを告げたのは、29歳の誕生日を迎えた昨日の朝。そして通夜があけた今日の昼前、郊外の斎場で僕の葬儀はささやかに行われた。

妻は自宅での葬儀を望んでいたようだ。でも、  
「そうすると、家のどこを見てもご主人が亡くなったときのことを思い出すわよ。思い出は楽しい方がいいんじゃないかしら」  
という友人のアドバイスに素直に従った。

本来なら当事者の僕は、葬儀に参加しなければならないのだろう。  
でもそうすれば、何かの手違いが生じて他の霊魂たちと一緒にあの世へ送られる恐れがある。  
そう思ったから僕はこうして、じいさんが現れるのを仏壇の中で待っているわけだが、正直言  
って、居心地が悪くて仕方がない。

でもそれは、仏壇の中が狭いからではない。

死ぬと無色透明の魂だけになると思っていたのだが、今でも頭や顔や手足がちゃんとついている  
からだ。身長は自分の意思で伸び縮みできるが、姿形は人間世界にいたときと全然変わらない  
。

変わらないのは、それだけではない。

人は死ぬと仏になり、物事にとらわれない澄みきった心の持ち主になると聞いたことがある。  
でも僕が今いるこの世界では、そういうふうにはならないらしい。  
僕のからだの中を、今も不安が渦巻いているのだ。

生命遮断機能は正常に作動したのだろうか。  
今僕は夢を見ているんじゃないだろうか。  
ここはじいさんのいる世界なのだろうか。  
じいさんは約束の日を忘れていないんじゃないだろうか。

と、僕の耳が、微かな鈴の音を捉えた。  
耳を澄ませる僕の頬が、勝手に緩み始めた。  
確かに、この音だった。  
壁にかかった時計に目をやると、正確さがうたい文句の電波時計の針は、約束した時刻の10  
秒前を示している。

間違いない。  
ここはじいさんが住む世界だ。

安心したせいかもしれない。からだは少し軽くなり、頭のとっぺんが狭い仏壇の天井にくっつ  
いてしまった。

あのじいさん、1秒の狂いもなく時間ぴったりに現れるつもりらしい。演出効果を狙っている  
のかどうかは分からないが、完璧さを追求する姿勢に僕は感心した。というより感動を覚えた。

だがそこで僕は、ひとつだけまずいことがあるのに気づいた。

この部屋には僕だけでなく、妻もいるのだ。

こんなところにじいさんが現れると、せっかくの計画が水の泡になる。  
弱ったぞ。どう対処すればいいのだろう。  
ところが妻をよく見てみると、仏壇に両手を合わせたままの姿勢で固まっていた。

えっ、じゃあ、じいさんはすでにどこかに？

と、部屋の中を見回そうとしたとき、「よおっ」と言う陽気な声とともに、じいさんが姿を現した。

僕は思わず涙ぐみそうになった。

じいさんは、あの日のままだった。  
人なつっこい顔。てかてかの頭。白いあごひげ。白装束で空中にあぐらをかいて浮かんでいるところまで同じだった。  
僕の脳裏に、あの日のことが鮮やかに蘇ってきた。

この人がいなかったら、僕はとっくの昔にあの世へ行っていた。

「助けて頂いて、本当にありがとうございました」  
僕は心を込めてお礼を言った。

だがどういうわけか、じいさんは困惑したような表情を浮かべただけだった。

僕は思わず首をかしげた。  
なんか、様子がおかしいぞ。  
『待ち遠しかった！』  
『早く会いたかった！』  
お互いにそう言って、熱い抱擁を交わして固い握手をするんじゃないのかな？

一瞬、僕の脳裏を「不適正」と「不採用」の文字がかすめた。  
しかし、いくらなんでもそれはないだろう。僕は文字通り、命をかけて約束を守ったわけだから。  
思考停止の一步手前の僕に、思案顔のじいさんが口を開いた。

「あのな」

じいさんは、そこで言葉を切った。それから間合いを取るように、頭の後ろを指先でぼりぼり搔いた。そして、ぼそっとした声で続けた。

「今なら何とかなるぞ。どうする？」

今なら何とかなる？  
どうする？  
その短い言葉を頭の中で何度も繰り返しながら必死で考えた。

このじいさん、僕の今の状態が分かっているのだろうか。僕の亡骸は火葬場で灰になって、冷たい墓の下。そんな僕に戻る場所があると、本気で思っているの？

呆然として言葉も出ない。

僕が黙っていると、じいさんは僕から視線を外した。そして合掌したまま固まっている妻を、しばらく優しい目で見つめたあと、その目をふたたび僕に向けると、諭すような口調で言った。

「嫁さんが可哀相だとは思わないのか？」

どうして今になって、そんなことを、と言いたいが、やはり言葉が出てこない。新婚間もない妻を未亡人にさせたのは、この僕に間違いのないのだから。

【2】

じいさんと約束を交わしたのは、僕が3歳になったばかりの頃だった。

その日は朝から冷たい北風が吹いていた。夜になると空から白いものが舞いはじめた。降り積もる雪の音まで聞こえてきそうな静かな夜だった。

そんな中、僕は温かい母の胸に抱かれてすやすやと眠っていた。  
ただならぬ気配で目が覚めたとき、二階はすでに火の海だった。

「神様、どうかこの子だけでも助けてください」

天に向かって叫ぶ母の声が、耳元で聞こえた。ドーンという鈍い音を残して、階段が燃え落ちた。

常々母はテレビのニュースや新聞の写真を僕に見せながら、火事の怖さを教えてくれた。だから僕は今自分が置かれている状況がどのようなものなのか理解できた。

しかし恐怖心のようなものは、ほとんどなかった。落ち着いていたと言った方が、いいかもしれない。

新聞社は明日の朝刊に載せる僕たちの写真をどうやって手に入れるのだろう。  
その心配の方が、ずっと強かった。

「ごめんなさいね」

僕を強く抱きしめた母が、そう言った。

僕たちもうすぐ死ぬ。

そう覚悟したとき、異変が起きた。僕の視界にあったすべての動きがぴたっと止まったのだ。

部屋中に渦巻くどす黒い煙。

砕け散った窓ガラスの鋭い破片。

夜空に舞い上がる不気味な形の赤い炎。

左手で僕を抱き、引きつった表情で宙を睨む母の横顔。

そのどれもが、ヴェスヴィオ火山の大噴火によって、一瞬にして死の街と化したポンペイ遺跡のジオラマのように見えた。

気がつくと、僕は音のない静止画の世界にいた。

微かな鈴の音とともに、白装束姿のじいさんが現れたのは、母の頬にべっとり張り付いた髪を直してあげようと、右手を伸ばしたときだった。

「おやまあ、この子は、この時間の流れの中で動いているぞ」

じいさんはびっくりしたような声で、そう言った。でも僕がじいさんから受けた衝撃は「おやまあ」なんて生やさしいものではなかった。じいさんは炎の上にあぐらをかいて浮かんでいたのだ。それも、笑顔を浮かべて。

「よしよし、もう大丈夫」

じいさんは固まったままの母の腕から、僕をそっと引き離した。

「今日こうして、同じ体質を持った子供に巡り会えたのは、何かの縁かもしれないなあ」

それからじいさんは天を仰いで、安堵したような表情を浮かべた。

【3】

あれから20数年の月日が流れた。

「くどいようだが、もう一度同じことを言う」

じいさんは、僕に顔を近づけた。

「やり直す気があるのなら、願いを叶えてあげるよ」

冗談じゃない。あの日僕は何度も言ったはずだ。

「ぼくも、おじいちゃんみたいな仕事をしたい」

確かにあのとき僕は、3歳だった。だが、三つ子の魂百までという。それに僕は生半可な気持ちで自分の寿命を決めたのではない。病弱だった父が精一杯生きた年月と同じ人生をこの世で過ごせたら、何の未練も残らないだろうと思ったからだ。

でもそんなことより、僕の身体の中に生命遮断装置をセットしてくれたのは、僕という後継者が見つかって喜んでいたじいさん本人だったはず。

それを何をいまさら。

僕はじいさんを睨んだ。

「やり直すって、何をどうやり直すっていうんですか？」

「つまりだなあ」

じいさんは、僕をなだめるように、ゆっくりとした口調で答えた。

「ワシとしては、お前を元の世界に、戻してやりたいんだよ」

「ば、馬鹿なことを言わないで下さい。僕がどんな気持ちで待っていたか分かりますか。合図の鈴の音が聞こえたとき、どんなに喜んだかわかりますか。からだが浮き上がって...」

「そんなこと全部分かっておる」

じいさんは、僕の言葉を遮った。

「だからこうして頼んでいるんだ。本当は強制的に命令したい気分なんだ」

あり得ない言葉の連発に絶句しそうになった。だが黙っていると承知したと誤解される恐れがある。僕は急いで言葉を繋いだ。

「もし僕の気が変わったとしても、一度骨になった人間を誰が受け入れてくれるというんですか？ 科学的に言っても、この状態から元の世界に戻れるわけがないでしょう」

思わず漏らしたその言葉を待っていたかのように、じいさんは嬉しそうに笑った。

「それがな、どんな世界にも例外というものがあるんだよ」

「例外？」

「そう、四角四面の規則だけじゃ、セシウム時間の世界は面白くないだろう」

「なんですか、そのセシウム時間というのは」

だがじいさんは僕の質問には答えず、何か考えるような目をして黙り込んだ。

話の展開がまったくつかめない。

これからどうなるんだ、この僕は。

場の雰囲気を変えようとして窓の外に目を向けた僕は、あることに気づいた。固まっているのは妻だけではなく。時計の秒針も窓の向こうの風景さえも写真のように見えた。

街灯の青白い光を浴び、闇の中に張り付いている無数の雨粒は、まるで冬の銀河に浮かぶ星屑のようだった。

僕はじいさんの横顔を見つめた。

まさか、このじいさん、宇宙の時間を自由に動かせることができるんじゃないだろうな。人は、このじいさんのことを、神様と呼ぶんじゃないだろうな。

そのじいさんが、白い歯を見せて僕を振り返った。

「じゃあ、お前の意思がどれほど固いか、試してみることにしよう」

どうやら僕に根負けしたらしい。

「期間はどれくらいですか？」

僕は笑顔で訊ねた。

「きっちり、7年」

人間世界に石の上にも三年という言葉がある。じいさんの世界では7年というのがそれに当た

るのかも知れない。

「いいですよ」と僕は答えた。「その間、アシスタントのようなことをするんですね」

「そうじゃない」

えっ？戸惑う僕に、じいさんは笑いながら言った。

「そこで待つんだ」

じいさんの指は、僕のいる仏壇をさしていた。

「ここでですか？」

僕は自分の足元を見つめた。

「そうだ。そこで7年待て。大丈夫、お前から嫁さんは見えるが、嫁さんからお前は見えない。都合の良いことにワシらは何も食べなくても生きていけるんだ。水もトイレも必要ない。本当は空気もいらないんだ」

じいさんはそれだけ言うと、空中に消えた。

【4】

7年間の自宅待機と言われたときは、そんなに長い間待てないと思った。でも妻の日常を眺めているうちに、年月はあっという間に過ぎてしまった。

妻が車の免許を取ったのは、僕が仏壇の隅で暮らすようになって一年半が過ぎたころだった。「運動音痴のあなたが、一発で受かるなんて奇跡だわ」「私もそう思うな。だってあなた、今でもスキップできないんでしょう？」「私だったら絶対に免許なんか取らないわ。カッコいい金持ちを見つけて、その人の助手席に座るわ。その方がずっと楽でしょ」

月に何度か様子伺いに訪れる妻の友人たちは、仏壇の前の真新しい免許証を見ながら、好き勝手なことを口にした。

そんな友人のひやかしの言葉に、妻は笑顔で答えた。

「いつまでもくよくよしたって始まらないと悟ったの。今までと違う自分になりたいの。自分の力だけで生きている野辺の花を、見に行きたくなったの」

いつもはどんな話でも笑みを浮かべて聞き流す妻が、真顔で答えたことがあった。

「私、絶対あんたの助手席には乗らないからね。だって私、長生きしたいんだもん」

それが軽い冗談だということは、妻も分かっていたと思う。だが妻はカップに注いでいたコーヒーポットをテーブルに置いて、その友人に顔を向けた。

「私、自分に誓ったの。たとえ何千万積まれても、助手席には誰も乗せませんって」

「あらら、いつまでもお熱いことで。仏壇の陰で感謝の涙を流しておいでですわよ、あなたの愛しい旦那様」

だれかが混ぜっ返し、笑いが起きた。一番大きな声で笑ったのは妻だった。妻が車の運転に慣れたころ、深刻そうな顔で僕を見上げたことがある。

「あなたに黙っていたことがあるの」

その言葉を聞いたとき、話の中に僕以外の男の名前が出てくるのだろうなと思った。僕の予想は的中した。しかし中身は全然違うものだった。

「私ね、本当は書道家になりたかったの。でも、中学一年のとき同級生の男の子から、みんなの前で『こんなの書じゃない。漫画だ』  
とからかわれたことがあってね」

そう言って一度部屋を出て行った妻は、書道用具を抱えて戻ってきた。そして硯の上で丁寧に擦った墨を太めの筆にたっぷりと染み込ませると、新聞紙の上に広げた和紙の上で一気に滑らせた。

妻をからかった男の子の気持ちが、分かったような気がした。

筆先から生み出された漢字の「一」が、僕には天空に身を横たえた龍の姿にしか見えなかった

。

妻がフラワーショップを辞めたのは、それから半年くらい後だった。

「これから、あなたの分まで頑張るから見ていてね」

伏し目がちにそう言った妻は、僕を見上げた。

「あなたが本当にやりたかった仕事は、どんな仕事だったのかしら。私との結婚が足かせになっていたんじゃないの」

いつものことだが、妻が仏壇を見上げるたびに、視線がぶつかった。もしかすると、僕の姿が見えているんじゃないかと思うこともあった。でもそれはやはり僕の思い過ごしだったようで、妻はいつも僕と目を合わせたまま、切なそうなため息を漏らした。

友人が手配してくれた大きな机が仏壇の前に運び込まれたその日から、妻は毎日、書と向き合った。口を軽く結んで姿勢を正し、真剣な目つきで和紙を見つめた後、ひとつの流れのように筆を踊らせた。

そして一枚書きあげるたびに、恥ずかしそうな笑みを浮かべて僕を見上げた。

「分かる？ これ、愛という字なの」

しかし僕には、それは縁側でひなたぼっこをする尾ひれの長い金魚にしか見えなかった。

「心」は霞にけむる春の山並み。

「夢」は風にゆれる大輪のダリア。

「星」は台座に座った仏様。

だが、人生何が幸運に結びつくか分からない。

妻が書きためていた書を一目見た友人が「これは面白い」と言ったのだ。その友人はアトリエを兼ねた喫茶店のオーナーだった。

それからわずか三ヶ月も経たないうちに、妻は地元新聞の夕刊の一ページを飾った。喫茶店の壁に貼ってあった妻の書を常連客の一人が、勝手に自分のブログに載せたのだ。それは瞬く間にインターネットを通じて全国に広がり、アクセスランキングのトップテンに顔を連ねたのを、新聞記者がたまたま目にしたのだ。

「ほら見て、こんなに大きく載っているわよ」

友人が持ってきた夕刊には、恥ずかしそうな笑みを浮かべた妻の顔写真と、書、それに一問一

答形式のインタビュー記事が載っていた。

「はい、ここに座って」

友人は恥ずかしがる妻の正面で、記事を読み上げた。

「すべて漢字一文字になっていますが、何か理由があるのですか」

「理由は何もありません。もしあるとしたら、私がまだ未熟者だということだけでしょう」

「一番人気の高い『愛』という文字には、なにか特別な思い出があるのでしょうか」

「いいえ、どの字も自然に手が動くんです。筆を持つと何か温かいものに包まれているような気持ちになるんです」

「それは亡くなられたご主人が見守っていらっしゃるということでしょうか」

「それはわかりません。でも初めて会った日の夢はよく見ます」

【5】

妻と出会ったのは、僕が社会人になって数年経った暑い夏の日だった。

その日僕は、流れ出る汗をハンカチでぬぐいながら、新商品のカタログが詰まったカバンをぶら下げて、人通りの少ない商店街を歩いていた。

真昼だというのに、突然辺りが暗くなったのは、リニューアルオープンののぼりがはためく花屋の前にさしかかったときだった。

「どうしたんだろう？」

空を見上げた瞬間、目もくらむような青い稲妻が走り、耳をつんざく雷鳴が地響きを立てた。

僕は子供の頃からカミナリが、大の苦手なのだ。

「ぎゃっ」

声にならない悲鳴を上げ、その場にしゃがみ込んだ僕の後ろで優しい声がした。

「知らないの？ カミナリは、幸せを運んでくれるのよ」

友人に話しかけるような声だった。  
でもこの辺りに知人はいない。  
僕はゆっくり後ろを振り向いた。  
笑顔を浮かべて僕を見ていたのは、花屋の看板と同じ赤いポピーの模様の入ったエプロンをつけた可愛い女の子だった。

「私の田舎では、カミナリの多い年は豊作になると言われているの」

彼女は親しげな口調でそう言うと、僕に手を差し出した。

「つかまって」

細くて白い手だった。とてもじゃないが、僕を起こせるだけの力はなさそうだった。

「大丈夫、自分で起きるよ」

僕は彼女のありがたい申し出を断ると、反動をつけて一気に立ち上がった。

「あら、運動神経は良さそうね」

彼女は目を細めてクスクス笑った。

歩道脇のフラワーポットの横にカバンを置いて、改めて空を見上げた僕は目を疑った。  
空は青く澄み、雲ひとつなかった。  
狐につままれたような気持ちでしばらく空を見ていた僕は、女の子に視線を向けた。

「君も聞いたよね、カミナリの音」

僕と目が合うと、なぜか彼女は恥ずかしそうな表情を浮かべた。そして頬を赤く染めて、自分の足元に視線を向けた。

「確かに聞きました」

彼女はうつむいたまま、つぶやくような声で言った。

どうして、急によそよそしくなったのだろう。

そんな疑問を持ったとき、僕は自分の頬も赤くなっていることに気づいた。

その日の出会いをきっかけに、僕は彼女の店に通うようになった。人見知りの激しい僕にしては、とても珍しいことだった。

毎日花を買い求める僕に、彼女は花の名前や、花言葉などを教えてくれた。でもそれは、僕が買った花に対してのものではなかった。

ひまわりの花言葉は「私の目は、あなただけを見つめる」  
朝顔が「愛のきづな」  
コスモスは「乙女の純情」

自分の部屋に飾った花を眺めながら、僕は彼女から教わった花言葉を、声に出して何度も何度も繰り返した。

僕が通うようになった頃から、花屋は繁盛するようになった。彼女がショーウィンドウに貼った花言葉のメモが、道行く人の間で評判になったのだ。

「本当に、恋人ができたの」  
「正社員になれたのは、この店で買った花のおかげだと思います」  
「連絡がとれなかった娘が帰ってきたんだ」

何人かの人々が店を訪れて礼を述べたらしい。

2週間もしないうちにその噂は町中に伝わり、開店前に小さな行列ができるようになった。

「すぐ支店を出そう。将来的には共同経営者ということでどうだろう」

喜んだ店主が彼女に相談を持ちかけたが、彼女はきっぱり断った。

僕の営業成績が急激に伸び始めたのも、彼女と出会った頃だった。

「どうすれば、こんなご時世に前年対比八割アップの成績を続けられるんだ」

会社の誰もが、同じことを訊ねた。でもその理由は、僕にもわからなかった。  
営業部長がそっと耳打ちした。

「どうだ、俺と組んで新しい会社を立ち上げないか。将来の副社長の座は約束する」

将来という言葉聞いた僕は、即座に断った。

僕はものごころつき始めたころから、将来という言葉を目にしたり、目にすると、頭の芯が痛くなって立っていられなくなるのだ。

幼稚園に入る前から、大学を卒業するまでどれくらいの医者に見てもらったか分からない。だがどの医者も、同じようなことしか言わなかった。

「MRIやCTスキャンで、どこをどう調べて見ても異常は見つかりません。心配は無用です。現代の科学を信じてください」

僕が買った花が彼女の部屋を彩るようになったのは、出会いから一年が過ぎた頃だった。

そしてそれから半年後、自分がアレンジした花束を胸に抱いた彼女と僕は、二人だけの結婚式を挙げた。

出会いの不思議さは、僕たちが結婚した後も何回となく話題に上った。

「あの日、カミナリが鳴らなかったら、僕たちこうして一緒になることはなかったと思うよ」

僕がそう言うと、妻はいつも同じセリフを返した。

「あのカミナリ、私たちが結びつけてくれた愛のキューピットだったのね」

そのたびに、僕は思った。

人生は実に面白い。

僕の大嫌いなカミナリが、僕と彼女を結びつけてくれたわけだから。

そのようにして、ほんの小さな偶然から知り合い、次第に意気投合していった僕たちだったが、二人は見事なまでに好みは正反対だった。

ごく普通のカレーに、僕は顔を歪めた。

「口の中で爆竹が炸裂したみたいだね」

甘みをおさえたショートケーキに、妻は顔をしかめた。

「なに、この甘さ。頭がくらくらして、気を失いそうだわ」

僕の好きな花は白いバラの花。

妻の好きな花は赤いスイトピー。

でも妻と出合ったおかげで、僕は苦手だった物事の大半を克服することができた。においも嗅げなかったいくつかの食べ物が僕の大好物となった。

しかしどう努力しても、カミナリだけは好きになれなかった。

【6】

そして今日、ついに願いが叶う日を迎えた。

「あなたが旅立ってから、七年経つのね」

妻はいつものように仏壇に手を合わせたあと、深いため息をついて、目を潤ませた。

「今日もいつもの花を一輪供えることにします。帰ってくるまで留守番よろしくね」

妻が外出して、かなり時間が過ぎたころじいさんが現れた。  
じいさんは仏壇の中の僕を眩しそうに見つめてから、ぼつりと言った。

「早いもんだな」

再延長の気配を感じた僕は、先手を打った。

「おかげさまで、今日僕の人生が変わります」

目を輝かせてそう言と、じいさんは素っ気ない声で言った。

「じゃあ、出かけよう」

「えっ、もうですか？」

最後に「今までありがとう」と言うつもりでいたのだが、何も知らない妻は外出中。

「はい、目をつぶって」

じいさんの言う通りにすると、僕の中を電流のようなものが走った。

これからどこへ？

と訊ねる間もなく「着いたぞ」という声が聞こえた。

目を開けると、そこはこじんまりとした駐車場だった。僕のすぐ横に妻の車が停まっていたが、妻の姿はなかった。

店の名前に見覚えがあった。ここは妻がいつも利用するスーパーの駐車場らしい。

店との間には、車2台がすれ違えるほどの道路があり、道路に沿って立てられたポールには、白地に黒で『無農薬野菜』と『地産地消』と染め抜いた二種類の細長いのぼりが、冷たい風に揺れている。

どうして、ここの景色は動いているのだろう。

そんな疑問を抱いた僕の視界の中に、排気音を響かせたバイクにまたがった若者の姿が入ってきた。

かなりのスピードだった。

真向かいのスーパーの自動ドアが開き、背中に赤子を背負った若い母親と、小さな男の子が出てきた。

嫌な予感がした。

じいさんも僕と同じ方向を見つめている。

これから何が起ころうとしているのか、おおよその見当がついた。

「おかあさん、当たったよ！」

右手に小箱のようなものを持った男の子が、道路を渡りきった母親の後を追ったとき、悲鳴に似たブレーキ音が空気を引き裂いた。

「あっ」

僕が思わず叫んだ瞬間、目の前のすべての動きが、ぴたっと、止まった。

恐怖で顔を引きつらせたバイクの若者は、硬いアスファルトから数センチのところに、背負い投げを食らった柔道選手のような格好で宙に浮いていた。

急ブレーキの反動で横すべりしたバイクは、男の子を跳ね上げるまであと数ミリのところまで迫っている。

それは、まるで地獄絵を連想させる立体的な静止画像だった。

「じゃ、行ってくる」

すたすたと歩き出したじいさんの後姿を、僕は息を殺して見つめた。

じいさんは、まず徒競走のスタートラインでピストルの合図を待つ格好で固まっている子供を抱きあげると、車のドアに手をかけている母親の後ろにそっと下ろした。

そしてすぐ引き返すと、大きくバランスを崩しているバイクを片手でひょいと持ち上げ、道路の中央付近まで移動させた後、宙に浮いている若者を抱え上げてバイクにまたがらせると、ヘルメットのあごひもを締め直して両手でしっかりハンドルを握らせ、スロットルレバーを少し戻した。

そして僕に向かって言った。

「ここでこうして手を叩く」

ポン。

それを合図に、バイクは何事もなかったように走り去り、母親はスカートの脇を引っ張る男の子に「おまけが当たったくらいで喜んでいると、車にはねられちゃうよ」と笑顔で言った。

「どうしてあんなことができるんですか。時間を逆回転させたんですか？」

じいさんは、とんでもないというように手を振った。

「時間は、元に戻すことも、止めることもできない。それは宇宙の大原則なんだ」

「でも確かに止まっていましたよ」

「いやいや、そう見えただけだよ。実際は数10億分の数秒くらいの時間が流れていたんだ」

数10億分の数秒という時間をイメージすることができず、首をかしげている僕に、じいさんが質問してきた。

「お前はセシウム原子というの知っているかな」

学校の成績は小学時代からどの学科も芳しくなかったが、理科だけは好きだった。テレビの科学番組は、ほとんど欠かさず見た。とくに興味を持っていたのが、宇宙と原子の関係だった。

と言っても、望遠鏡や実験道具を使って自分の目で観測や観察をするのではなく、テレビやインターネットなどで得た表面的な知識に過ぎなかったのだが...

「人間世界の1秒は、セシウム原子の振動数を基準に決められていましたよね。振動数は一秒間に90数億回だったと思います」

「ほほお」

じいさんは感心したような目で僕を見た。

「振動数を知っていれば話が早い。この任務についている者は、危険に直面している人間に遭遇した瞬間、体内時計が自動的にセシウム原子の周波数に切り替わるんだ。そうなると人間時間の1秒の間に、90数億秒分の仕事ができるようになるんだ。もちろん自分の意思で体内時計をセシウム時間に切りかえることもできる」

90数億秒？

「でも、特別なことは何もないんだ。止まったようにみえる時間の中で、ものを動かすだけだ。単なる力仕事なんだ。憧れの的になるような仕事ではない」

数字に弱い僕には、90数億秒という時間がどれくらいの長さになるのか見当もつかなかった。

60秒が1分で、その60倍が1時間で...と指を折っている僕に、じいさんは嬉しそうな顔で言った。

「一言で言えば、超の下にいくつもの超がつく超スローモーションの世界で、自分だけが普段道理に動き回ることができるってことだよ」

そのあと、じいさんは、まだ合点がいかず、目をぱちぱちさせている僕の脳天を一撃する言葉を吐いた。

「あの約束は、無かったことにする」

ショックで我に返った僕は、思わず怒鳴り返した。

「何を言っているんですか。あの約束は生まれて初めてした約束です。絶対に守ります」

じいさんは、やれやれというような顔で首を横に振った。

「あのときはほんとに嬉しかった。引退を考えたその日に後継者を見つけたものだから、つい指切りげんまんをしてしまったんだ。お前が大人になって、嫁さんをもろうなんて思ってもみなかった」

この期に及んでそんな話を持ち出すのは、卑怯というものだ。  
僕はぴしゃりと言った。

「無駄な話はやめて下さい」

じいさんはほんの一瞬、一本取られたというような表情を浮かべたが、分かった分かったと言うように軽くうなずいてから、顎をしゃくった。

「あれはなんだ？」

見ると、スーパーの自動ドアが開いて、買い物かごを手にした妻が姿を現したところだった。

「妻です」

「それは分かっておる」

じいさんは、笑いながら言った。

「かごから顔を出している花の名前は、何だと聞いているんだ」

目をこらさなくても、それがこの七年もの間、妻が毎日僕の前に飾ってくれた白いバラだというのは分かった。

「あれがどうかしたんですか？」

僕が振り向いたとき、そこにじいさんの姿はなかった。

「あのな」

頭の上から声が降ってきた。  
青い空にぼつんと浮かんだ雲の上で、じいさんは頭を掻いていた。

「よく調べたらな、自分が助けたやつを後継者にできない決まりになっていたんだよ」

あまりにも無責任な言葉に、気を失いそうになった。

「つまり、あの約束は最初から無効だったってことさ」

スマン、というようにじいさんは両手を合わせた。

「お詫びの印に、お前に二つの選択肢を用意した。ひとつは、あの世へこのまま直行すること」

そこでじいさんは、笑顔を浮かべたまま黙り込んでしまった。  
じいさんの姿が消えようとしているのに気づいた僕は、慌てて声を張り上げた。

「もうひとつは、どこなんですか！」

叫んだ瞬間、目がくらむような青い稲妻が走り、耳をつんざく雷鳴が地響きを立てた。

「ぎゃっ」

声にならない悲鳴を上げ、その場にしゃがみ込んだ僕の後ろで優しい声がした。

「知らないの？ カミナリは、幸せを運んでくれるのよ」

【了】